

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月14日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2018

課題番号：25370239

研究課題名(和文)「歴史・時代小説ブーム」の戦後精神史(二大作家の比較研究による)

研究課題名(英文) A study of postwar mental history of the history novel Booms (by a comparative study of two major novelists)

研究代表者

高橋 敏夫 (Takahashi, Toshio)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：20236300

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は1960年代から現在にいたる計4回の「歴史・時代小説ブーム」の内容と意義をそれぞれのブームを中心に担った二人の作家の比較研究を通して明らかにした試みである。4回のブームとは、司馬遼太郎と吉村昭の「歴史小説」ブーム、池波正太郎と隆慶一郎の「悪党小説」ブーム、笹沢佐保と諸田玲子の「股旅小説」ブーム、山本周五郎と藤沢周平の「市井小説」ブームである。最も長いブームは1990年代初めから現在までほぼ25年間続く「市井小説」ブームである。庶民の日常を細やかに描く市井小説は、作者の側からみれば戦争への抵抗から始っており、読者の側からみれば「日常生活」崩壊への抵抗に拠っているのを本研究で明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代文学において現代小説は研究、批評の対象になっているのに対し、歴史・時代小説は書評の対象になっても研究、批評の対象にはなっていない。ここには純文学優位、大衆文学劣位という序列が顕在化している。しかし純文学の何十倍もの読者がいる歴史・時代小説を無視すれば、現代文学の大きな領域が見えなくなる。本研究は1960年代から現在までの歴史・時代小説の4つのブームの内容と意義を、ブームを中心に担った二人の作家の比較研究を通して明らかにした。中でも最も長い「市井小説」ブームについて、作者と戦争との関わり、読者と日常生活との関わり両面からアプローチできたのは歴史・時代小説の意義を考えるうえで重要だろう。

研究成果の概要(英文)：This study is an attempt to clarify the contents and significance of the "History and period novel boom" of a total of four times from the 1960s to the present through comparative research of two writers who played a central role in each boom. The four booms are the "Historical (Rekishishi) novel" boom of Shiba Ryotaro and Yoshimura Akira, the "Picaresque (Akutou) novel" boom of Ikenami Shotaro and Ryu Keiichiro, the "Wandering life of gamblers (Matatabi) novel" boom of Sasazawa Saho and Morota Reiko, the "Popular (Sisei) novel" boom of Yamamoto Shugoro and Fujisawa Shuhei. The longest of the four booms is the "Popular novel" boom that lasts almost 25 years from the beginning of the 1990s to the present. The "Popular novel", which depicts ordinary people's daily life in detail, was a book that, from the author's side, it had started from resistance to war, and from the reader's side, it was based on resistance to the collapse of daily life. It clarified in this study.

研究分野：日本近代・現代文学

キーワード：歴史小説 時代小説 悪党小説 股旅小説 市井小説 山本周五郎 藤沢周平 時代小説の戦争

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

小説の一大ジャンルとして多くの書き手と膨大な読者を有する歴史・時代小説は、1990年代以降、従来にない規模のブームをひきおこしている。これは、1950年代後半の「剣豪小説」ブーム、1960年前後の「忍者・忍法小説」ブーム、そして1960年代にはじまる「歴史小説」ブームなどに比べてもいっそう大きなブームである。

しかし、このようなブームを巻き起こしてきた歴史・時代小説については、学術的かつ総合的な研究はほとんどなされてこず、その結果、ブームについてはもとより時代小説について持続的に考察しうる場および組織（例えば「歴史・時代小説」学会）が形成されなかった。時代小説作家と「時代小説」論を研究課題にする研究者はきわめて少数で、これは対象を「大衆文学（現在では「エンタテインメント」とよばれる）」にひろげても変わらない。

従来、歴史・時代小説研究は、故尾崎秀樹を中心とした大衆文学研究会にあつまる在野の研究者と評論家の手にゆだねられてきた。「大衆文学」を掲げるがその大半は歴史・時代小説の歴史と理論の提示である尾崎秀樹の『大衆文学』（1964）や『大衆文学の歴史 上・下』（1989）は、依然として研究に欠かせない。大衆文学研究会による調査・評論、またフランスの研究者セシル・サカイによる概論『日本の大衆文学』（1997）や評論家縄田一男の『武威』（2002）、さらには歴史学者成田龍一の『大菩薩峠論』（2006）などを参照しつつ、時代小説の持続的で包括的な研究をはじめめる必要がある。その研究対象としては個々の作家作品研究とともに、歴史・時代小説の意義が凝縮されるブームの研究が重要である。これなくしては、純文学偏重の続く日本現代文学研究および文学史研究は、大きな欠落を放置せざるをえないだろう。わたし（研究代表者）は本研究を、歴史・時代小説の持続的で包括的な研究の始まりと位置づけたい。

2. 研究の目的

本研究は、個々の作家作品の詳細な研究および、歴史・時代小説の意義が凝縮されるブーム研究の両者を同時に充たすために、各ブームを担ってきた二人の作家作品を比較研究する。わたし（本研究代表）はこれまで、「歴史・時代小説」分野では主として、時代小説の起源のひとつ『大菩薩峠』（中里介山）と現代時代小説を研究および批評の対象にしてきた。その成果の一部に『理由なき殺人の物語 中里介山「大菩薩峠」をめぐって』（廣済堂出版刊 2001）、『藤沢周平 負を生きる物語』（集英社 2002 第十五回尾崎秀樹記念・大衆文学研究賞受賞）、『周五郎流 激情が人を変える』（日本放送協会・NHK 新書 2003）、『藤沢周平という生き方』（PHP 新書 2007）、『藤沢周平の言葉』（角川新書 2009）、『井上ひさし 希望としての笑い』（角川新書 2010）、『時代小説が来る』（原書房 2010）他がある。こうした個別的な試みを続けながら、「歴史小説」「市井小説」「股旅小説」などのジャンルの意義を歴史的な展開に即して明らかにしたいと考えてきた。それには、ジャンルごとのブームがはっきりと確定できる戦後歴史・時代小説ブームを研究対象に選ぶのがよいと考えた。刻々と産出される歴史・時代小説の書評、時評、評論を書くことで確認できた歴史・時代小説の継承と変形という視点から、戦後「歴史・時代小説」の歴史を逆照射できるのは本研究の特色のひとつである。

本研究があつかう時代は、戦後とりわけ歴史・時代小説ブームがはっきりとする1960年前後から新たなブームが到来する1990年代まで、ほぼ40年間に限定する。戦後の「歴史・時代小説」が同時代文学のなかで大きなウェイトを占める時期である。もちろん、これらの大きなブームをうかびあがらせるために、戦前から1950年代までの歴史・時代小説のありかた、および2000年代にはいつてからの「戦国武将小説ブーム」なども概観する。

3. 研究の方法

5年間の研究対象と方法は以下の通りであった。

一 2013年度 戦後「歴史・時代小説ブーム」の概観・区分・戦前との差異研究

1910年代における歴史・時代小説の成立（森鷗外と中里介山）からはじめ、岡本綺堂、国枝史郎、白井喬二、大仏次郎、長谷川伸、子母沢寛、吉川英治らの作品を概観し、さらに戦後すぐのGHQの意向が反映された捕物帳ブーム、1950年代半ばの剣豪小説ブーム、つづく忍者・忍法ブームなど、そして、1960年代の「歴史小説」ブームから、1990年代の「市井小説」ブームに至るまでをまとめた。こうした研究を活かしながら、新たに刊行、書き下ろされる歴史時代小説の論評、書評を積極的に行った。

二 2014年度 歴史小説ブーム（司馬遼太郎と吉村昭）研究

戦後の「歴史小説」ブームをひっぱったのは、司馬遼太郎（1923～1996）である。『竜馬がゆく』の連載がはじまるのは1962年。司馬が好むのは、個々の可能性が試される「変動期」だった。司馬が人物にも出来事にもおおきな「うねり」をみだし、物語にクライマックスを仕掛けたのに対し、吉村昭（1927～2006）はそうした「うねり」ばかりかクライマックスも徹底して排した。司馬と吉村の主要作を比較検討し、「歴史小説」ブームをとらえた。こうした研究を活かしながら、新たに刊行、書き下ろされる歴史時代小説の論評、書評を積極的に行った。

三 2015年度 悪党小説ブーム（池波正太郎と隆慶一郎）研究

悪党ものなら、まず池波正太郎(1923~1990)である。1968年にスタートし著者の死により未完となった『鬼平犯科帳』は、数百人の悪党を擁するシリーズもの。1972年に連載のはじまる『剣客商売』および『仕掛人・藤枝梅安』にも悪党が多く登場する。隆慶一郎(1923~1989)が、『吉原御免状』で小説デビューをはたすのは1984年。池波の悪党が人間の暗部の象徴に格納されてしまうのに対し、悪党を歴史的動乱の生きいきとした闇に解き放つのが隆の壮大な企てだった。池波にはじまり、隆が発展させた悪党小説ブームをとらえた。こうした研究を活かしながら、新たに刊行、書き下ろされる歴史時代小説の論評、書評を積極的に行った。

四 2016年度 股旅小説ブーム(笹沢左保と諸田玲子)研究

ミステリー作家笹沢左保(1930~2002)によって、木枯し紋次郎が登場したのは1971年である。「赦免花は散った」にはじまる全113篇の物語(『木枯し紋次郎』シリーズおよび『帰って来た紋次郎』シリーズ)を笹沢は、28年間書きつく。衰えを意識した紋次郎が『帰って来た紋次郎 最後の峠越え』で静かに利根川土手を東へ消える直前の1998年、驚異の新人諸田玲子の清水次郎長一家シリーズ『空っ風』はでた。新旧の股旅小説を比較した。こうした研究を活かしながら、新たに刊行、書き下ろされる歴史時代小説の論評、書評を積極的に行った。

五 2017年度+2018年度 市井小説ブーム(藤沢周平と山本周五郎)研究

『藤沢周平全集』の刊行開始は1992年。今につづく市井小説ブームがはじまるのとはほぼ同時だった。藤沢周平(1927~1997)の端正な文体でえがかれた静謐な世界には、権力や権威はもとより、富や安定から遠い、ごく普通の人々の、逆境の日々の喜怒哀楽があざやかにうかびあがる。「市井小説」のはじまりは、山本周五郎(1903~1967)の『柳橋物語』である。新旧市井小説を比較し、1990年代の市井小説ブームの特色を取り出した。こうした研究を活かしながら、新たに刊行、書き下ろされる歴史時代小説の論評、書評を積極的に行った。

4. 研究成果

初年度だった2013年度の研究は、近代における歴史時代小説の成立の意義をたしかめることからはじめたが、これをおこなう過程で、二葉亭四迷『浮雲』からはじまる知識人文学が「孤独な個人」を生成させるのに対し、大衆文学とりわけ歴史時代小説では登場する個人がしだいに寄り集い「なかま」を形成していくことを確認した。それは最初期の時代小説『大菩薩峠』に顕著であった。2011年の原発震災以後、新たに書かれる時代小説作品においてもこうした「なかま」の形成が自覚的になされていたことから、『時代小説はゆく 「なかま」の再発見』というタイトルで著書の刊行を進めて、年末には実現した。総ページ数278、出版社は東京の原書房である。

2014年から2017年まで、各年度の研究計画を実行しながら、それを活かしながら時評・書評・文庫本解説を書き、論文、評論を書いた。そして、2017年末から著書にまとめようと準備し、形になったのは2019年3月のことである。

山本周五郎が始め藤沢周平が独特に発展させた「市井もの」が、二人の作家の戦争体験と深く関わっていたこと、主として1990年代以後に登場する作家たちが二人の作家の「市井もの」をそれぞれに継承したこと、さらに2000年代後半に登場した若手の作家たちが「市井もの」の水平的な共生思想をベースに、江戸時代以前の激動の時代、すなわち大きく歴史が変更される時代の物語をえがきはじめてきたこと、などなどを一冊の本にまとめた。

全体を二部構成とし、第一部は『死』の物語に抗う『生』の物語、第二部は「堅固な歴史的常識をゆさぶる」とした。第一部は「強者にたちむかう」、「語り直しは生き直し」、「現代の暗黒、孤立と貧困にとどく」、「こことは別の世界へ、これとは別の生き方へ」、「なかまたちの饗宴」の五章分けとして、それぞれに四、五本の文章を収めた。第二部には、三十三本の書評を新しいもの順に並べた。山本周五郎と藤沢周平の関係について論じた複数の文章、藤沢周平をめぐる新刊の書評も入って、「戦争」はもとより様々な角度から二人の「市井もの」の意義を明らかにできた。個々の文章、書評には、本研究『歴史・時代小説ブーム』の戦後精神史(二大作家の比較研究による)で積み重ねてきた各ブームの戦後精神史的研究が活かされているのはいうまでもない。

当初、タイトルは『時代小説の「戦争」』であったが、編集者との会話のなかで、『抗う 時代小説と今ここにある「戦争」』となった。総ページ数305、出版社は東京の駒草出版である。

以上の2冊の著作に収めなかった論文と評論がある。

まず、「二つの『蟬しぐれ』——本文の異同から創作意図を考える」について。藤沢周平の代表作の一つと見なされる『蟬しぐれ』だが、連載中の作者には「苦痛」をもたらした作品であった。下の者を上の者が使い捨てるといった垂直的な武家秩序への認めがたさから、武家もの時代小説を始めた藤沢周平は、しかし、『蟬しぐれ』では少年牧文四郎に父とふくをめぐる惨い出来事を受け入れさせたうえ、それらをもたらした理不尽で暴力的な武家秩序に閉じこめた。しかも、新聞連載の長篇小説というスタイルは、拘禁にも似た境遇を文四郎に長く強いた。物語には他方で、文四郎の受動性のきわみでそれを反転させる契機となる能動性の仕掛があった。武家秩序の外へではなく、武家秩序の内部であるがゆえに秩序を動かしうる可能性へと物

語は文四郎を導こうとする。しかしそれは文四郎の物語に伏流しつつも、実現は、文四郎の惨憺たる青春物語ののちに始まる助左衛門の新たな物語においてだった。こうしたことが、文四郎の特異な設定とも相まって、新聞連載時の作者藤沢周平に「苦痛」をもたらしつつづけたのだろう。そして単行本にする際の改稿によって、まるで文四郎の受動性をまるごと引きうけ反転させるような助左衛門の能動性を顕在化させるなどしたとき、ようやく藤沢周平に「少しは読みごたえのある小説」との手ごたえがもたらされたのである。

つぎに、「取返しのつかぬことにこそ「橋」を架ける 山本周五郎『柳橋物語』の「戦争」について。時代小説は、おおきく「武家もの」と「市井もの」とに二分される。江戸下町を生きる人びとの登場する『柳橋物語』は、もちろん「市井もの」に分類されるだろう。しかし、わたしたちが現在のブームにあって、ごくあたりまえのように享受している「市井もの」のはじまりこそ、『柳橋物語』なのだ。『柳橋物語』は、ときに大火や出水によって唐突な途切れがもたらされるにもかかわらず、すぐに修復されてつづく江戸下町の生活世界を舞台に、十八歳のおせんが幼馴染の職人庄吉と幸太の間に辿る数奇な半生の物語にして、きわみでのゆたかな再生の物語である。『柳橋物語』は、「時局とはりあわせの微妙なところで、しかし、時局便乗とはぎりぎりちがうものをえがいた」(山田宗睦による評)とはいうものの、戦中に精神主義的な「武家もの」である『日本婦道記』(一九四三年)を書いた山本周五郎が、生き急がずじっくり腰をすえ、町人の日々の生活にとりくもつと、敗戦の翌年の一九四六年に書きだした作品(刊行は一九五一年)である。『柳橋物語』にはじまり、『おたふく』(一九四九年)、『むかしも今も』(同上)など戦後あいついで発表された山本周五郎の「市井もの」(「下町もの」)は、じしんの戦争(戦時)との危ういかかわりへの猛省と、人間観の反転からはじめられたのである。ただし、その戦争への猛省と人間観の反転は、談話にまして、『柳橋物語』によってこそあきらかにされていた。それが、人びとが大火(山本周五郎の関東大震災や戦中の大空襲の記憶もこめられていた)においつめられ死んだ行き止まりにこそ、「橋」をかけるという願いであり行為である。「此处に橋があればよかったんだ」、「橋を架けなくちゃあいけねえ、どうしても此处に橋が要るよ」と人びとは言う。これは、道のはてにあらわれて彼岸につなぐ美学的な「日本の橋」(保田與重郎)ではなく、惨禍のきわみという行き止まりを行き止まりにせず、次の新たな生活へとつなぐ「必要の橋」といってよい。幸太を大火で失い、庄吉も去った。物語のおわり近く、逆境のきわみにおかれたおせんは、心のなかでさげふ。「……なにもかにもが取返しのつかないほうへ曲がってしまったのよ、あなたは死んでしまい、おせんはこんなみじめなことになって、そうして初めてわかった、なにが真実だったかということが、ほんとうの愛がどんなものかということが……」。取返しのつかない場にきたという思いがはっきりさせる「真実」と「ほんとうの愛」こそ、おせんにとって新しい生活へのびる「橋」にほかならない。おせんが新しい生活にふみだしてまもなく、物語は、新しく架かった橋が「柳橋」と名づけられたことを告げる。「柳橋の祝いに集まる人たちだろう、表は浮き立つようなざわめきで賑わっていた」と、橋をみごとに称揚して物語はおわる。人びとの願いが橋を架け、おせんの生きる意欲が橋を架けた『柳橋物語』は、山本周五郎が戦争による壊滅と戦後の生のあいだに架けた橋であった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- (1) 高橋敏夫、二つの『蟬しぐれ』——本文の異同から創作意図を考える、国文学研究、査読有、177号、2015、98P 109P
- (2) 高橋敏夫、取返しのつかぬことにこそ「橋」を架ける 山本周五郎『柳橋物語』の「戦争」、別冊文芸 山本周五郎、査読無、2018、52P 57P

〔図書〕(計2件)

- (1) 高橋敏夫、『時代小説はゆく 「なかま」の再発見』、総ページ数278、2013、原書房
- (2) 高橋敏夫『抗う 時代小説と今ここにある「戦争」』、総ページ数305、2019、駒草出版

〔その他〕(計11件)

- (1) 高橋敏夫、生きつづける藤沢周平/生誕九十年、没後二十年によせて(1) 没後二十年がイメージできない、山形新聞、2017/12/19
- (2) 高橋敏夫、生きつづける藤沢周平/生誕九十年、没後二十年によせて(2) 時代小説ブ

ームの実行者、山形新聞、2017/12/20

- (3) 高橋敏夫、生きつづける藤沢周平ノ生誕九十年、没後二十年によせて(3) 戦争嫌い、熱狂嫌い、流行嫌い、山形新聞、2017/12/21
- (4) 高橋敏夫、家康を討てば戦争は起こらない、柴田錬三郎『真田十勇士(三)』巻末解説、2016、集英社文庫
- (5) 高橋敏夫、人と社会の暗黒領域を探索する、宮部みゆき『泣き童子』巻末解説、2016、角川文庫
- (6) 高橋敏夫、「戦後」論としての江戸物語、武内涼『人斬り草 妖草師』巻末解説、2015、徳間文庫
- (7) 高橋敏夫、苦境こそが晴れ舞台、山本一力『千両かんばん』巻末解説、2015、新潮文庫
- (8) 高橋敏夫、黒い歴史を切り裂く閃光、乾緑郎『賽の巫女 甲州忍び秘伝』巻末解説、2014、朝日文庫
- (9) 高橋敏夫、変わらぬならこの自分が変える、あさのあつこ『東雲の雲』巻末解説、2014、光文社時代小説文庫
- (10) 高橋敏夫、水平線にきらめく「なかま」の光景へ、山本兼一『銀の島』巻末解説、2014、朝日文庫
- (11) 高橋敏夫、ともにたたかう「なかま」が共和国、佐々木譲『婢伝五稜郭』巻末解説、2013、朝日文庫

その他、本研究をふまえ、雑誌、新聞などに掲載された書評、時評、批評多数あり。ここでは省略する。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 敏夫 (TAKAHASHI TOSHIO)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：20236300

(2) 研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。